

# 「近江のキャベツ」の生産安定と収益性向上

大津・南部農業農村振興事務所農産普及課

## 【普及活動のねらい・対象】

当課では、平成 27 年度より、5 市・4 J A に提案し、冬季の温暖な気候や近郊に消費地を抱える立地条件を活かした環境こだわりキャベツの作付を推進しています。出荷先である地元市場と連携を図りながら、4 J A で統一した出荷箱を作成し、「近江のキャベツ」とネーミングして出荷されています。

昨年度は、L・2Lサイズの割合が低く相対的に小玉傾向であったことから、当初目標とした市場出荷量が確保できず、収量や品質、労働時間の短縮による収益性の向上が課題となっています。そのため、今年度は、安定生産と収益性の向上をめざし、「近江のキャベツ」生産者を対象に支援を行いました。

## 【普及活動の内容】

### ①個別指導の徹底

生産者に対し、J A と協力しながら現地研修会の開催や個別指導、情報紙の発信等を行いました。ほ場準備時の排水対策から収穫・調整に至るまで、ポイントを押さえて支援を行い、収量や品質の向上につなげました。



写真 生産者・関係者による現地巡回

### ②省力施肥体系の実証

昨年度の調査研究において畝内局所施肥と麦・大豆用被覆緩効性肥料を利用した省力施肥体系の効果が期待されたため、現地実証ほを設置し、生育や収量、品質等を確認しました。

### ③新品種の検討

今後の有利販売による収益性の向上をめざし、高糖度の新品種「とくみつ」、「ふゆみつ」の試作を行い、栽培特性や品質を把握するとともに、導入の可能性を検討しました。

## 【普及活動の成果】

J A と連携した技術支援により、L・2Lサイズの割合は昨年度より向上が見込まれ、安定生産につながりました。収益性の向上を目指した省力施肥体系の現地実証では、施肥効果を確認することができ、次年度から栽培暦へ登載するなど、技術の普及を進める予定です。また、新品種「とくみつ」は良食味で収量性も期待でき、拡大意向を示す生産者もおられ、今後が期待されます。

「近江のキャベツ」の栽培面積は、前年度の 15 名・360a から、24 名・592a と増加し、今後一層の拡大が期待されます。当課は、関係機関での体制づくりや情報交換を促進し、「近江のキャベツ」の定着を支援します。

### ◎対象者の意見

省力施肥は良かったが、同じ品種でも作付時期により生育差があり、検討を望む。「とくみつ」の面積拡大を図り、「彩音」と継続出荷したい。（「近江のキャベツ」生産者）